

金田一耕助最後の事件

病院坂の首縊りの家

上

横溝 正史

角川文庫



びよう いん ざか くび くろ いえ
病院坂の首縊りの家

(上) 全二冊

よこみぞせいし
横溝正史



角川文庫 4245

昭和五十三年十二月二十日 初版発行
昭和五十六年八月三十日 九版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一(大代表)

二一〇二 振替東京①一九五二〇△

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-130461-0946(0)

病院坂の首縊りの家

金田一耕助最後の事件（上）

横溝正史

目次

序 詞

港区大變貌のこと

砦の隠居独白のこと

七

第一部

輪廻の章

二三

第一編

法眼鉄馬とその一族のこと

一五

法眼・五十嵐三重の縁のこと

第二編

芝高輪本條写真館のこと

三五

風鈴のある結婚風景のこと

第三編

法眼弥生は片眼が偽眼であること

四四

天竺浪人という名の詩人のこと

第四編

耕助首縊りの家を探検すること

一三四

蛆虫を嘔みしめる美少女のこと

第五編

ジャズ・コンボ「怒れる海賊たち」のこと

本條直吉ふたたび風鈴を撮影すること

一四

暗中模索の章

二七

解 説

中島河太郎

三八

序 詞

港区大変貌のこと

砧の隠居独白のこと

いま私の机上には東京都区分詳細図、全二十三区のうち港区の地図が二葉ならんでいる。古いほうは昭和二十八年に発行されたもの、新しいほうはおなじ地図出版社から発行された、昭和四十八年度版によるものである。

この二葉の地図を比較してみると、戦前から戦後、さらに戦後から現代へかけての東京都の変貌が、いかに激しいものであるかが一目瞭然である。だいたい戦前には港区などという区はなかったように思う。私の記憶がもうひとつ定かでないのだけれど、そこに編入されている赤坂××町や麻布××町、芝××町などというのは、戦前それぞれ独立して、赤坂区、麻布区、芝区と呼ばれていたのではないか。

私は大正十五年、即ちのちの昭和元年に上京してきて、それ以来、九年から十四年までの信州上諏訪における闘病生活時代、二十年から二十三年へかけての岡山県への疎開時代をのぞいては、引きつづき東京都に住んでいるのだが、昔の赤坂、麻布、芝方面へかけての知識はまことに浅かった。それというのが上京以来私の勤めていた出版社は小石川にあり、その縁で私も小石川からのちに闘病生活に入るまで吉祥寺に住んでいたもので、現在の港区方面は私にとっていたって無縁の土地であった。神戸生まれで神戸育ちの私にとって、東京という都市はあまりにも広過ぎたの

だ。

だから戦前私の持っていたその方面に関する知識といえは、赤坂は軍人相手の花柳界のあるところ、麻布といえは練兵場、芝といえは高輪の泉岳寺くらしいのだが、私は七十三歳になるこの年まで、いまだに泉岳寺さえしらないくらいだから、広い東京でもこれほど私にとって縁のない土地も少ないだろう。

だが、私がなぜこのようなことをくだしく書いているかといえは、これからお話ししようとしている、あの世にもおぞましき事件の舞台となった、いわゆる「首縊りの家」のある病院坂というのは、麻布と芝との境目にあたっているからである。その辺はやたらに坂の多いところで、いま眼のまえに並んでいる二枚の地図をみても、魚藍坂とか伊皿子坂、名光坂とか三光坂、蜀江坂。義士外伝で有名な南部坂雪の別れの南部坂なども、ほど遠からぬところにあるらしい。ほかには仙台坂、明治坂、新坂、奴坂、狸坂等々々、枚挙にいとまあらずだが、なかには暗闇坂などという物騒な名前の坂もある。

私がこれからお話ししようとしている問題の坂は魚藍坂のちかくにあり、この坂にも江戸時代から呼びならわされた、由緒正しき名前があるのだけれど、坂の途中に大きな病院があるところから、いつのほどよりか病院坂と呼ばれるようになっていたので、私もこのまがましい物語のなかではその名を踏襲することにする。その病院こそはこの物語のなかで、大きなウエイトを占めているのだから。

いったい病院坂という名はあちこちにあるらしく、げんに私がいま住んでいる成城の町にもお

なじ名の坂がある。しかも、成城の病院坂は坂の名の由来となった病院が、いまや跡方もなくなっているのに反して、これからお話ししようとしている病院坂には、いまでもなおその坂の名のいわれとなった、法眼病院ほうがんという大きな綜合病院が繁栄しており、昭和四十八年度版の地図にはその名が記入されているくらいである。

それにしても、これは東京都の他の二十二区にもいえることだが、いま二枚の地図を比較してみるに、なんとという大きな変貌がそこに看取できることだろう。だいいち町の名前からしてずいぶん変わってしまったものだ。

なるほどこうして町名を整理し、区画を整備していくと、郵便物の配達などには便利なのだろうが、いたって懐古趣味的な私には、古い由緒ある地名が、つぎからつぎへと消えていくのが惜しまれてならぬ。

それにまた道路の広くなったのはどうだろう。そういえば昭和二十八年の地図でみると、復興計画路線と称して、いたるところに三〇メートル、五〇メートルの予定路線が点線で示してあり、それは町であろうが、墓地であろうが、公園であろうが、遠慮容赦もなく引き裂き、引きちぎっている。なるほどこうしたほうが合理的であり、万一有事のさいの避難手段になるのかもしれないけれど、町というものが成立しているには、それ相当の事由じゆがなければならぬ。それをこう情け容赦もなく分断するのはどうであろかと、いつか心の寒くなる思いをしたことがあるが、いま四十八年の地図でみると、それらの予定路線は大半実現しているらしい。ここいらに日本人の旺盛なエネルギーを窺うかがい知ることができるのかもしれないが、さて立ち退きを命じられたひとび

とはその後どこへいったのか。またこの広い道路の沿道に住むひとたちの生活は、果たして快適といえるだろうか。

さらに二十八年の地図と現代のそれを比較してみても、路面電車が姿を消して、地下鉄が縦横に走っているらしいこと、それと新幹線と東京タワーとモノレールの出現である。

新幹線はいまや日本の誇りになっていくらしいし、東京タワーは東京名物である。地方に生きている私の孫は、上京してくるとわざわざモノレールに乗りに行くのである。すべては戦後三十年におけるわが国の驚異的發展の象徴かもしれないけれど、年老いて、万事につけて退嬰的になり、みづから砦の隠居と称している私にとっては、あの虚しい高度成長の落とし子としか思えない。

それにしても私がなぜ昭和二十八年の地図と、現代のそれを比較してお眼にかけたかというところからお話しようとしているこの恐ろしい物語は、じつに昭和二十八年の八月二十八日にはじまって、昭和四十八年の四月三十日に、やっと解決したという、金田一耕助の扱った事件としては、他に類を見ないほど長年月を要した事件なのである。その間じつに十九年と八か月、金田一耕助の手腕をもつてしても、それだけ長い歳月を必要としたのは、それはそれなりの事情があったにせよ、これは世にも驚くべき事件であった。

こういう書きかたを見ると、また金田一耕助に叱られるかもしれない。私はいつかかれからこういう注意をうけたことがある。ついでにいつておくが、いま私の住んでいる成城という町は、昔砦村とよばれていたそうなの。そこでいたって懐古趣味である私は、自分のことを砦の隠居とよんでいるのだが、そういう私をつかまえて、かれは成城の先生とよぶのである。

「先生は私の功名談をお書きになるとき、よく発端はつたんとか大団円だだんえんとかいうことばをお使いになる。発端ということばはまだよいとして、大団円というのはどうでしょう。私はその文章を拝見するたびに、いつも抵抗を感じずにはいられないのです。大団円ということばは終局を意味しています。わたしの扱った事件に関するかぎり、わたしの解決がまちがっていたとは思えない。しかし、それだからすべてが終わったとも思えないのです。よく始めあれば終わりありといいますが、わたしはそのことばを信じない。事件そのものは解決しても、その瞬間、そこからまた新しいドラマが出発するのではないかと思うと、わたしはいつも不安でもあり、怖こわくてたまらなくなることもあるんですよ」

金田一耕助は暗い眼をして、いつか私にこう訴えたことがある。

私は私でかれの功名談を記録にのこすとき、つぎのようなことばをよく使っている。

「かれの脳細胞のなかで事件が解決にちかづいたとき、金田一耕助は救いようのない孤独の影におおわれていく」と。

おそろくかれは事件そのものは解決しても、それですべてが終わったのではないということを知っているのだろう。いや、そのみならず、そこからまた新しいドラマ、かれが解決した事件よりもっと恐ろしい事件が、展開していくのではないかということを怖れているのだろう。

これからお話ししようとしている「病院坂の首縊りの家」の事件などまさにそのいい例なのだ。昭和二十八年の夏にはじまったこの事件は、十九年八か月という長い歳月を経て昭和四十八年の四月三十日に解決をみたと思われるのだが、果たしてそれですべてが終わったのであろうか。

二度あることは三度あるとよくいうが、そこからまた恐ろしい血みどろの事件が進展していくのではないかと思えば、私はいまこうして筆を執^とつていても、背筋^{せすじ}が寒くなるような戦慄^{せんりつ}を禁^こじることができないのである。

閑話休題^{かんわきゅうだい}。

それではいよいよこのおぞましき事件にむかつて筆を進めようと思うのだが、そのまえにどうしても紹介しておかなければならないのは、この事件の中心となった法眼病院^{ほうげんびん}の創始者、法眼鉄馬^{てつば}とその一族に関する記録である。

これはもちろん昭和二十八年の夏に起こった、あの世にも奇妙な事件の調査に着手するに当たって、金田一耕助が作成しておいた調査資料にもとづくものだが、金田一耕助のそれがそうとう厖大^{ぼうだい}なものであったのを、私が適当に圧縮して、この物語に必要と思われる事実だけにダイジェストしたものである。

第一部

輪廻^{りんね}の章

第一編

法眼鉄馬とその一族のこと

法眼・五十嵐三重の縁のこと

一

法眼鉄馬、文久二年東北のさる大藩の典医、法眼琢磨の長子として生まれ、幼名を銀之助とい
ったという。たったひとりの妹に千鶴というのがあり、明治三年うまれたというから、銀之助よ
り八つ年下だったが、銀之助とは母を異にしていたという。

さて銀之助だが、明治五年父琢磨にともなわれて上京、本郷の進文学舎にはいりドイツ語を学
んだ。いまにして思えば当時は文明開化の声がさかんな時代であった。おそらく琢磨はおのれの
倅をもつて、父祖伝来の家業を継がせようと思ったのだろうが、自分がうけた教育では、いまや
新時代に通用しなくなっていることをしっていたのであろう。その点に関して鉄馬は終生父の恩
を肝に銘じていたという。しかもかれもまたよく父の期待にこたえたのである。明治十年、十六
歳にして東京大学医学校の本科生となったというのだから、いかに早熟な時代だったとはいえ、
やはり梅檀は双葉より芳しかったというべきであらう。